

乳用雄子牛の早期若齢肥育試験

福田誠実・古賀儀保・野見山敬一

(福岡県種畜場)

FUKUDA, N., KOGA, Y. and NOMIYAMA, K.

Fattening Experiment of Holstein Steers Finished as Short Yearling.

ホルスタイン種雄子牛の牛肉生産に占める割合は多くなり、精肉用としての肥育が望まれている。

現在、出荷体重は大きくなる傾向にあり、出荷月齢も延長されている。本試験では出荷月齢の延長と経済性を早期若齢肥育方式によって比較検討したのでその概要を報告する。

1. 試験方法

試験は昭和45年3月に開始し、46年4月に終了した。4週齢で去勢した雄子牛6頭を2区に分け、11週齢から試験を開始した。終了はA区59週齢、B区67週齢とし単飼を行った。

飼料給与は育成期(11~24週齢)にDCP10.5%、TDN70.0%、肥育期(25週齢~終了まで)にはDCP9.0%、TDN72.0%の配合飼料を自由給飼した。粗飼料は稲ワラを全期間自由採食させた。

両区とも出荷予定17週前に肥育剤(プロゲステロン200mg、安息番酸エストラジオール20mg)を耳根部に埋設した。

2. 試験成績

(1)増体成績 増体成績は第1表に示すとおりである。1日当り増体量は両区とも1.1kgを越えており発育は正常であった。目標体重は特に設けなかったが、A区(約14ヵ月齢)で507.7kg、B区(約16ヵ月齢)で572.0kgとなった。

第1表 増体成績(単位=kg)

区分	開始時体重	終了時体重	増体重	1日当り増体重
A区	103.5	507.7	404.2	1.178
B区	116.3	572.0	455.7	1.142

(2)飼料摂取量及び飼料費

育成期(98日間)の採食量はA区485.2kg、B区506.6kgで、その差は21.4kgであった。肥育期の採食量はA区1.882kg、B区は2.506.3kgでB区が624.3kg多く摂取した。全期間ではA区の2.367.2kgに対し、B区は645.7kg多い3.012.9kgであった。

全期間の稲ワラを含む飼料費はB区が90,360円、A区は114,700円で1kg増体に要した費用はA区=223.6円、B区251.7円となりB区が28.1円/kg高く付いた。

(3)と体成績 と体成績は第2表に示すとおりである。終了時体重、温と体重は当然B区が大きくなり、その差は生体重では64.3kg、温と体重で36.0kgである。平均単価はA区613.3円、B区630.0円でB区が16.7円高く販売できた。(この時の福岡食肉市場の去勢並の単価は600円~625円であった)。

第2表 と体成績

	終了時体重	温と体重	枝肉歩留	枝肉単価
A区	507.7kg	298.0kg	58.7%	613.3円/kg
B区	572.0	334.0	58.4	630.0
B-A	64.3	36.0	△0.3	16.7

(4)差益計算 差益計算は第3表のとおりである。販売価格(ゴミ皮、内臓代を含む)はB区が27,643円高く販売できたが、飼料費が24,340円高く付き、また素牛が3,337円高かったため、肥育差益では両区に差がなかった。これを1日当りの差益で比較すれば、肥育期間を56日長くしたB区が、28.2円不利となった。

第3表 差益計算(単位=円・日)

	販売価格	飼料費	素牛代	肥育差益	1日当り差益
A区	185,413	90,360	26,910	68,144	199.3
B区	213,056	114,700	30,247	68,110	171.1
B-A	27,643	24,340	3,337	△34	△28.2

3. 要 約 :

59週齢と67週齢仕上げとに肥育期間を変え、肥育試験を行った。肥育期間を56日間長くしたことにより枝肉重量が増し、枝肉単価も上昇したが、飼料費の増加によって相殺され、肥育差益は変わらなかった。1日当りの差益では肥育期間が長くなっただけ不利益となり、早期若齢肥育方式における肥育期間の延長には十分な配慮を払う必要があると思われる。